

# 明治二十七年、二十八年の虚子

—『五百句』評釈—

小澤 實

高浜虚子句集「五百句」に評釈を加える。

まず「五百句」の「序」を引用する。

ホトトギス五百号の記念に出版するのであつて、従つて五百句に限つた。

此頃の自分の好みから言へば、勢ひ近頃の句が多くならねばならぬのであるが、然し古い時代の句にもそれ／＼其時代に應じて捨て難く思ふものもあるので、先づ明治・大正・昭和三時代の句を略等分に採つたことになつた。

範囲は俳句を作り始めた明治二十四五年頃から昭和十年迄、即昭和十一年十一月二十日に出版した「句日記」の句までとしたので、其後の句は此集には洩れてゐる。

昭和十二年五月二十七日

ホトトギス発行所

高浜虚子

「ホトトギス」昭和十三年四月号は五百号にあたる。序にもあるように、これを記念して、歴大な虚子の作品の中か

ら五百句が選ばれた。(同時に「ホトトギス同人句集」(昭和十三年・三省堂刊)が刊行されている。)この作業については、高浜年尾が『定本高浜虚子全集 第一巻 俳句集一』(昭和四十九年・毎日新聞社刊)の解説の中で『年代順虚子俳句全集』(新潮社版・全四巻)を基にしての自選であると指摘している。

また、序に「先づ明治・大正・昭和三時代の句を略等分に採つたことになつた」とあるとおり、明治期、一二八句、大正期、一六一句、昭和期、二二一句という配分で選ばれている。この句集以前に虚子は、『稿本虚子句集』(明治四十一年・俳書堂刊)、『自選類題虚子句集』(大正三年一月「ホトトギス」付録)、『虚子句集』(大正四年・植竹書店刊)、『虚子句集』(昭和三年・春秋社刊)、『句集虚子』(昭和五年・改造文庫)、『句日記』(昭和十一年・改造社刊)などの句集を刊行しているが、これらの句集の集大成と言えよう。

また、「ホトトギス」が号を重ねるにつれて『五百五十句』(昭和十八年・桜井書店刊)、『六百句』(昭和二十二年・菁柿堂刊)、『六百五十句』(昭和三十年・角川書店刊)と編まれていくが、これらは『五百句』とは違い、短い期間の句集だつた。

『五百句』は、昭和十一年以降の作品は収めないとはいえ、虚子句集中、最も凝縮度の高い、虚子の句業を代表する句集といえよう。

底本は『五百句』(昭和十二年・改造社刊)とし、適宜『定本高浜虚子全集 第一巻 俳句集一』(昭和四十九年・毎日新聞社刊)を参照した。

『五百句』全句にわたる評釈、鑑賞は、無いが、明治期の句については、浜中柑児著『虚子五百句鑑賞 明治之部』(昭和十六年・改造社刊)がある。

春雨の衣桁に重し恋衣

初出は「めさまし草」(まきの二・明治二十九年二月号)。虚子は「春雨二十句」と題して

春雨や蝶々遊ぶ傘の内

摺鉢に何植ゑて見ん春の雨

春雨のともし火細し普門品

春雨や伊予の温泉のうす煙

春の雨歌読まんとて寝入りけり

春の雨花なき森のすさまじき

春雨の葎生ひけり羅生門

春雨や李夫人おきず香煙る

春雨の衣桁に重し恋衣

芋をうんで今日もくれけり春の雨

春の雨ひだるうなつて寒うなる

飛鳥井の鞠音絶えて春の雨

春雨の泥川のぼる田船かな

春雨や燕騒ぐ塔の上

明治二十七年

金屏の灯静かなり春の雨

春雨や誰がたきものすこの夕

春雨や傘渡る裏の川

春雨や京もの語り更け渡る

春雨ややき蛤のやける音

熱海温泉

温泉の中に石浮屠立てり春の雨

以上二十句を発表している。その中の一句。

異同は

春雨の衣桁に重し恋ごろも

(「新俳句」明治三十一年・民友社刊)

季語は「春雨」で、季節は三春。「万葉集」「古今和歌集」以来の伝統的な季語。「三冊子」に「春雨は小止みなく、いつまでも降り続くやうにする、三月をいふ」とある。

「春雨」と「衣」は縁が深い。「連珠合璧集」は「春雨」の寄合に「衣」を載せる。この寄合については「古今和歌集」にわがせこが衣はる雨ふるごとに野べの緑ぞいろまさりける

が見える。「わがせこが衣」は「はる」の序となっている。女性が衣を洗い張りする実景を暗示する有心の序であるが、この歌などから、この寄合が生まれたのであろう。

俳諧においても

はるさめやぬけ出たまゝの夜著の穴

文章

「文章発句集」

が著名である。夜著とは「着物の大型のもので、厚く綿を入れて寝るとき上にかけるもの」。衣を夜着としたところに文章の俳諧があった。その底に、寄合の影響を見ることが出来る。掲出句は、もっと直截に、その二語を用いている。不性さやかき起されし春の雨

芭蕉

「猿蓑」

春雨や同車の君がさゝめごと

蕪村

「蕪村遺稿」

「三冊子」は春雨と春の雨を区別しているが、芭蕉の句のものうげな気分は、春雨にもつながる。また春雨には蕪村の句にみられるような艶な気分もある。

「衣桁」は「衣服をかけておく台。鳥居のような形の、ついたて式のもの」と、真中から二枚に折れる折り畳み式とがある」。(「日本国語大辞典」俳諧における用例は

山は衣桁かゝる霞の衣哉

静香

「毛吹草」

自嘲

春の夜や紫衣を掛けたる塗衣桁

大谷句佛

「句佛上人発句抄」

などがある。

「恋衣」は歌語である。虚子の造詣深かった謡曲にも用いられ、「鉄輪」「雲林院」「梅が枝」「松山鏡」などに、その用例が見られる。

恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間なく時なし吾が恋ふらくは

【万葉集】

藤原俊成

恋ごろもいかに染めける色なれば思へばやがてうつる心ぞ

【後拾遺和歌集】

などのように常に心から離れない恋を、身を離れない衣に見たてた語であった。それが恋する人の衣服と転じ

土御門院

妹待つと山のしづくに立ちぬれてそぼちにけらし我がこひ衣

【風雅和歌集】

と用いられるようになる。衣そのものが詠われるようになる。そして「濡る」「涙」「雨」などとともに詠われることが多い。

前参議雅有

しらせばや人をうらみの恋ごろも涙かさねてひとりぬる夜を

【新後撰和歌集】

権僧正慈仙

ぬれてほすひまこそなけれ恋ごろも身をしる雨の晴れぬ思ひに

『続千載和歌集』

恋衣色にはいでじしもとゆふまさきのつなのよるの時雨に

光明峰寺入道前撰政左大臣

『新統古今和歌集』

みさほにも涙のかゝるこひ衣あはぬかぎりはほされやはする

臺のさほ

などの用例をあげることができる。つまり恋衣―雨―涙は、縁の深いことばであるといいうる。

御伽草子『調度歌合』

先ほどの春雨と衣の寄合とあわせてみると、春雨と恋衣は、たいへん関係の近いことばであることになる。伝統的で情緒纏綿たるその二つの語の結びつきを、「衣桁に重し」という表現によって視覚化し、感覚的にとらえなおしたとてろにこの句の仕立がある。

この句は「春雨」と「衣桁に重くかかっている恋衣」の二つの取合でできている。それを

春雨や衣桁に重き恋衣

としていない。単純な取合の形にはしていないのだ。句切れは「重し」のあとにくる。「春雨の衣桁に重し」で、それが一たん切れることによって、より一層、重さが感じられるのだ。そこに単なる叙景句には了らせない、虚子のおもいが感じとれよう。

音も工夫されている。ローマ字で表記してみる。

(harusame no / iko ni o mo shi / ko i go ro mo)

母音に注目してみると「o i」の交替が三回、「i o」の交替が四回つくられている。これが春雨の音のような効果をあげている。

さて、『虚子五百句鑑賞 明治之部』は、この句について次のように説く。

○外には春雨がしめやかに降つてゐる。室内も雨のためにしめやかである。部屋の隅の衣桁には重げに恋衣がだらりと掛つてゐることよの意。

◎衣桁に掛つてゐる花やかな衣を見て、恋衣と断じるからは、多分廓情緒を詠んだものであらう。

さうした種類の女が、その花やかな衣に身をやつして、情痴に狂つた態が想像される。

春雨のしめやかに降つてゐる時、だらりと重さうに晴衣の衣桁に掛つてゐるのは、さては昨夜の恋道中は雨だつたな、といふやうな聯想が起る。春雨の降つてゐる狭斜の巷ほど、濃艶な感じのするものはない。

「重し」といふ語は「恋ぞつもりて淵となりぬる。」といふやうな多難な恋や、「しつぱり濡れて」などいふやうな場面も思ひ出されて、まことによく働いた語である。

大意は問題がない。外―室内―部屋の隅の衣桁―恋衣と、視野を絞っていく詠い方であることを示しているのがいい。さて鑑賞であるが、かなり自由に書かれている。「衣桁に掛つてゐる花やかな衣を見て、恋衣と断じるからは、多分廓情緒を詠んだものであらう」という線で、廓情緒が味わわれていく。

『色道大鏡』に「新艘の部屋には、太夫の時衣桁三脚、天職の時二脚たつる。夏の季たりといふとも、小袖共にがさる」とあるように、衣桁は廓に置かれてあるものだったが、だからといって遊廓に限定できまい。時代的にも、空間的にも、もっとひろがりをもって読みたい。



明治二十八年ごろ、虚子は河東碧梧桐とともに放蕩生活を送っていた。それは、碧梧桐の「寓居日記」によって知られる。また、その日記の明治二十八年五月二十四日には「恋衣」という名の吉原の女性も登場している。遊郭は、この句の発想に関わっているかもしれない。しかし、作品としては、平安時代の宮中の女性とも、近世の豪商の娘とも読みうる普遍性がある。遊廓とは離れて、もっと普遍的な恋として読む可能性を残しておきたい。

初出の「春雨二十句」は春雨による題詠を試みたものだろう。多くは、春雨と、それ以外のものとの取合でできている。春雨の情趣に似合ったものが取合され、平凡な句が多い中この句が抜けでているのは「重し」の働きた。それは「鑑賞」の説くとおりでである。客観的な描写にとどまらず、心の動きまで感じさせる。「めさまし草」(まきの三・明治二十九年三月)の「消息」に「虚子が春雨二十句拜見いたし候」として大谷纒石の評がのっている。この句については「恋衣は重しといふ字に重きをなせるやう覚えられ候」とある。成立直後に、それはすでに指摘されていた。

「めさまし草」は森鷗外中心の文芸雑誌。「日清戦争による鷗外出征のため「休刊」し、そのまま廃刊となった「しからみ草子」のあとを継ぎ、鷗外帰国三ヶ月後に創刊された」。(『日本近代文学大辞典 第五卷 新聞・雑誌』昭和五十二年・講談社刊)この雑誌の意義は鷗外の具体的な作品批評が現れた点と晩天子(露伴)、登仙坊(緑雨)、鐘礼舎(鷗外)の三者、あるいはこれに依田学海、饗庭篁村、尾崎紅葉および森田思軒を加えた顔ぶれによる「好色一代女」「水滸伝」など和漢古典の合評にあった。この合評という形式は「ホトトギス」における蕪村の研究などにつながっていくものである。また、この雑誌は田山花袋によって「大家達の新しい時代に対する防禦運動」(『近代の小説』)とも呼ばれていた。合評のメンバーを見れば、いかなる大家がいるかは明らかであるが、仮に掲出句の初出である明治二十九年二月号の執筆者と題を掲げると次のようになる。

春雨二十句

虚子

狹筵

眉山

あすならう

把月

鷗翻搔

瘧休庵（鷗外）

喙権太

三木竹二

独逸新戯曲

鷗外

「虚子自伝」には中学五年のとき、「国民の友」を求めて、幸田露伴の「一口剣」を読んだり、「早稲田文学」「しがらみ草紙」を見つけ、逍遙、鷗外の間之交された「没理想論」も面白いと思って読んだとある。虚子は二十歳にして、それら大家に伍しているのだ。

「俳句の五十年」には、「鷗外との関係」という項が立てられている。以前からひそかに尊敬していた鷗外との関係が、どうしてできたのかは「今日では確かな記憶がないのであります」と言いながらも次のように述べている。「子規と鷗外とは、戦地で知り合いになつたという話が、此間何かの雑誌に出てゐた柳田国男の談話の中にあつたやうに思ひます。それが事実とすれば、子規と鷗外とが戦地で知り合いになつて、その関係から子規に紹介して貰つて鷗外を訪ねたのかも知れません」。子規は金州にて第二軍兵站軍医部長の鷗外を訪ね、以後、毎日のように連句を巻いている。子規「病床日記」（明治二十八年六月五日）、鷗外「徂征日記」、柳田国男「俳談」（俳句研究十七巻五号）による。（子規全集第二十二巻）昭和五十三年・講談社刊、年譜参照）その交渉も「私が行くといふと、ごく家庭的に待遇せられるので、何の隔てもなく出入する事が出来ました」とある。かなり親密なものだった。また、同書によれば、鷗外の「うた日記」に収められている俳句は、虚子の選を経ている。

さて、この句は「五百句」巻頭に置かれている。巻頭に濃艶なる恋の句が置かれたことは、虚子の文学において、あるときは表となり、あるときは裏となりつつも、流れつづけた艶なるものの存在を考えさせる。

夕立やぬれて戻りて欄に倚る

明治二十八年。子規を神戸病院より、須磨保養院に送りて数日滞在。

初出は「自選類題虚子句集」（大正三年一月「ホトトギス」付録）。

異同はない。

季語は「夕立」で、季節は三夏。この語はすでに「万葉集」において用いられている。しかし、その用例「暮立ゆんだちの雨落るごとに春日野の尾花おぼなが上の白露念ねんはゆ」は秋の俄雨である可能性がつよい。夏の季語として確定するのは「古今六帖」天「夫木和歌抄」夏に題として現れて以降となる。

源俊頼朝臣

雲隔遠望といへる心をよみ侍りける

遠ちには夕立すらしひさかたの天のかぐ山くもがくれゆく

「新古今和歌集」

この歌の「雲隔遠望といへる心」は、欄に倚り、はるかを見望むこの句とも重なるところがある。

欄はてすり、らんかん。

謡曲「班女」に欄干の用例であるが、次のようなものがある。「あだし言葉の人心。頼めて来ぬ夜は積れども。欄干に立ちつくして。そなたの空よとながむれば。夕暮の秋風嵐山嵐野分もあの松をこそは音づるれ」。『類船集』の欄干の付合語にも「そなたの空よと詠る」がある。欄は、はらかな空を思いを籠めてながめる際の舞台装置のひとつだった。

「虚子五百句鑑賞 明治之部」は次のように説く。

◎朝宿を出かける時は、夕立の来さうな気配もなかつたのに、思ひがけずも夕立に逢つたのであらう。

夕立といへば——豪雨——雷電がつきものである。いかに雨宿りを乞ふ家もないからとて、さゞ降りの中を濡れて戻る筈もないから、「濡れて戻りて」と叙されてあるからは、ひどい雷雨の時はどこかの軒先で雨宿りをしてゐて、急に霽れさうにもないので、小降りになつてから、あまり遠くもない宿へ、濡れて戻つたのであらう。

なぜ「ぬれて戻」ったのか、また、その状況を縷々説いているが、想像の域を出ない。

まず、「夕立」を詠うに「ぬれて戻りて」としている点、あまりに夕立にふさわしすぎ、拍子抜けするようだ。しかし、そのように思わせながら畳みかけるような表現によって、走ってきた心臓の鼓動まで感じさせているところを味わいたい。(yu da ti ya / nu re te mo do ri te / ra ni yo ru) はっきりわかる「て」の音とともに多用されている r の音がリズムカルだ。

同書は、さらに、戻ってみると小降りになつていて「大雨のあとの蘇生したやうな天地が「欄に倚る」の一語に余蘊なくうち出されてゐる」と説く。

夕立は「庭の面はまだかわかぬに夕立のそらさりげなくすめる月かな 従三位頼政」『新古今和歌集』など、さっと去っ

たあとのさわやかさが詠われてきた。そのような夕立の本意に添った鑑賞で、肯える。

ただ、この句にほのかに感じられる恋の雰囲気に触れてはいない。欄が「はるかな空を思いを籠めてながめる際の舞台装置」であることは、先に述べた。

加えて、この句がつくられたのは「須磨」であった。須磨は平安時代、在原行平が流された地。それを素材につくられた謡曲「松風」は、松風村雨という海人少女が都に去って死んだ行平を慕う思いが描かれた。また「源氏物語」の須磨においても源氏は都に残してきた女たちを思う。また、上巳の日の御禊の際の暴風が描かれている。「肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず」。「類船集」の「驟雨」の付合語にも、この場面によるのだろう。「須磨」という語がある。間接的ではあろうが、この代表的な歌枕もっている気分、遠く離れた愛する人を感じる気分が、この句をなさしめたとも言いうる。

明治二十八年二月、正岡子規は日清戦争に従軍記者として参加することを決意する。三月三日、広島へ向う。二十一日に従軍許可があり、四月十日、海城丸にて中国へ発つ。十七日、日清講和条約締結。不当な扱いに悩み、帰国を求め。五月十四日、佐渡国丸で帰国の途に。十七日、咯血。病状、日々悪化する。二十三日、和田岬検疫所に入り、従軍の義務すべて終る。県立神戸病院に入院。二十四日、陸羯南に電報を打つ。二十七日、羯南からの電報で京都にいた虚子が看病に来る。虚子は六月十三日から七月五日までは松山へ行っているが、七月二十五日、帰京するまで看病に つとめている。子規の病状は快方に向い、七月二十三日、神戸病院を退院、須磨保養院へ移る。虚子は二十五日に帰京するので、この句の成立は、七月二十三日、二十四日、二十五日の間となる。

虚子の「子規居士と余」に保養院に移った子規が描かれている。

保養院に於ける居士は再生の悦びに充ち満ちてゐた。何の雲翳も無く、洋々たる前途の希望の光りに輝いてゐた居

士は、之を嵐山清遊の時に見たのであつたが、たとひ病余の身であるにしても、一度危き死の手を逃れて再生の悦びに浸つてゐた居士は之を保養院時代に見るのであつた。

子規再生の喜びは、虚子の喜びでもあつた。この句に明るい心躍りを感じるのは、虚子の心境の反映でもあろう。

同書によれば、このあと虚子帰京の前夜、子規は虚子に後継者たることを委嘱する。虚子はこの場では、「身に余る負担を双肩に荷はされたやうな窮屈さ」を感じながらも「唯だばんやりと其を聴き乍ら唯點頭うなづかいてゐた」。しかし、これが、同年十二月、道灌山の茶店において子規の再度の委嘱を虚子が拒絶する、いわゆる「道灌山事件」につながつていくのである。

なお、虚子の没後編まれた『七百五十句』（日本現代文学全集25 高浜虚子 河東碧梧桐集 昭和三十九年・講談社刊）に次のような句が見えている。

月を思ひ人を思ひて須磨にあり

（昭和二十六年＊小澤補記）九月  
十四日 須磨、保養院の跡を訪ひ、  
須磨寺小集

晩年の虚子は、須磨保養院跡に立ち、子規を偲び、さらには古人に思いをはせている。

そしてこの「月を思ひ」の句は「ことつてよ須磨の浦わに昼寝すと 子規」と併刻され、句碑として須磨浦公園に立つ。その建碑の際の句も『七百五十句』にある。昭和二十八年の句である。

子規、虚子並記の句碑、須磨に建つ由

君と共に再び須磨の涼にあらん

風が吹く仏来給ふけはひあり

明治二十八年。八月。下戸塚、古  
白田廬に移る。一日、鳴雪、五城、  
碧梧桐、森々招集、運座を開く。

初出は新聞「日本」(明治二十八年八月二十六日(月)第二六三号)。第一面左下隅に鬼来、吞海、竹桐、花牛堂、蛇足、鹿水、露石、碧梧桐、牛伴、飄亭、竹湍、木半、無事庵、青谷、竹窓、波静、鳴雪以上十七名の句のあと、最後に置かれてゐる。

迎火

風か吹く仏来玉ふけはひあり

異同は、初出の形があげられる。

この句には季語は見えない。しかし、初出時の新聞「日本」には「迎火」という題が付されているし、「自選類題虚子句集」にも「迎火」という題の下に見える。

迎火は盆の魂祭に火をたいて精霊を迎えること。初秋の季語である。「滑稽雑談」「通俗志」など江戸期の歳時記が季語として認めている。

迎火や風に折戸のひとり開く

風をもって迎火を詠う句としては、この句を先蹤とすべきであろう。

蓼太

「虚子五百句鑑賞 明治之部」は

○風が習々と座に流れ込んでくる。八月とはいへ、夜の風はどことなく爽やかである。今は五闌盆であるから、その爽やかな風に乗つて、髣髴と仏が来さうな気配が感ぜられるよといふ句意。

と説く。この「爽やかな風」という評は行過ではないか。

「風が吹く」といふ上五が「仏来給ふ」といふ中七に極めてしつくりしてゐる。それは「その風に乗つて」といふ想の聯関があるからである。

とも評されている。

謡曲を見ると「風」の変化が靈の出現のきっかけになつてゐるものが少くない。

「天鼓」においては「頃は初秋の空なれば。はや三伏の夏たけ。風、一声の秋の空夕月の色も照り添ひて。水滔々として。波悠悠たり」ということばのあと、後ジテである天鼓の靈が現れる。「船弁慶」においても、ワキである武蔵坊弁慶が「あら笑止や風が變つて候。あの武庫山風弓絃羽が嶽より吹きおろす嵐に。此御舟の陸地に着くべき様もなし。皆々心中に御祈念候へ」というと、義経の従者であるワキツレが「いかに武蔵殿。此御舟にはあやかしが憑いて候」と答える。風が變つたあと、あやかしが憑くのである。

『類船集』の「風」の付合語にも「無常」が見え、「無常」の付合語には「風」が見える。このような伝統が「風が吹く」といふ上五が「仏来給ふ」といふ中七に極めてしつくりしてゐる」と感じさせるのだらう。

音もいい。k音が散らされていて凜とした印象がある。

さて、虚子は東京専門学校に坪内逍遙のシェークスピアの講義を聞くために入学する。同時に東京府豊島郡下戸塚村四三四北田方、古白旧廬に移る。「此の家はもと死んだ古白君の長く仮寓してゐた家であつたといふ事が余をして此家



をトせしむるに至った主な原因であつた」と『子規居士と私』にある。古白については後述する。入学した東京専門学校であるが、坪内逍遙はワーズ・ワースの詩を講じており、それには興味を感じることができず、すぐに通うのを止めている。

この明治二十八年八月の句会は子規の句評入句稿を読むことができる。「ホトトギス」明治三十七年一月号および二月号に発表された「はれの日」と「古庵り」である。

子規の病気が快方に向い、帰京した虚子は碧梧桐、鳴雪、五洲、森々と運座を開く。時、所ともに未詳であるが、虚子が須磨を発つた七月二十五日以降のこととなる。この句稿を須磨保養院の子規に送ると、詳細な批評が加えられて返送されてきた。さらに、同じ顔ぶれでもう一回運座が開かれる。それが「古庵り」という句稿の残っている運座である。「ホトトギス」掲載時に虚子が付している解説を引用する。

(前略) 其後十余日、余は新たに高田馬場の、もと古白が住まつてゐた家に居を移したのを機として、其処の婆が茄子の鳴焼が得意といふのを御馳走に、鳴、五、碧、森の四氏を案内して再び運座を催ほした。これが「古庵り」である。此名はいふ迄もなく古白の旧寓といふところから来てゐるのぢや。これにも前同様詳細なる批評がついて歸つて来た。

「古庵り」の表紙には「八月十七日須磨発」と内藤鳴雪が書いている。そこから「八月上旬の会合であつたと思はれる」と虚子自身が推定している。

この日、運座は二回開かれるが、この「風が吹く」は第一回運座に出されている。そして子規は天位に取り、「句法ノ巧妙、老成家ノ手ニ成リタラン」と評している。

その句の前後に

猿曳の迎火焚きに戻りけり

碧梧桐

蚊は外に仏迎ふる煙かな

鳴雪

がある。三句とも迎火を詠んでいる。迎火という題で詠まれたのだろう。虚子は迎火ということばを詠み入れずして、一番核心をつかんでいる。碧梧桐は「猿曳」という登場人物を入れることによって、鳴雪は「蚊は外に」という寸景をとらえることによって一句にまとめているが、弱い。

宮坂静生の指摘によれば、子規には、明治二十六年の大晦日の追儺を詠んだ句に

風吹て鬼逃<sup>に</sup>げて行くけはひあり

がある。子規は、この句をたまたま詠んだのではなく、「風吹て」という上五音のフレーズで、明治二十六年には、元旦から大晦日まで百句詠んでいる。魂祭の句には

風吹て聖霊いそぐ帰り道

もある。これら子規の句を承知の上で、迎火という席題が出て盆の直前であったこと、「つれづれ草」第十九段「折節のうつりかはるこそ」の一節、追儺の夜を「なき人の来る夜とて魂まつるわざは、この比都<sup>くら</sup>にはなきを、東<sup>あづま</sup>のかたには、なほする事にてありしこそあはれなりしか」とした個所への連想がはたらいたことよって、魂祭の句としたのではないかとする。以上「仏来給ふけはひ」考（『岳』昭和五十七年八月号）による。

「はれの日」「古庵り」における子規の句評は等類に厳しい。「河骨や水を出兼る花幾つ 鳴雪」には「小生旧作「河骨の水を出かねる春哉」ト命意相似タリ」（はれの日）と評が加えられ、点をつけていない。また「すのこふめばはたと鳴きやむきりくす 虚子」には「涼菟「橋わたる人に静まる蛙哉」ヨリ出テ痕跡アリ。殊ニ原作ヨリ拙ナリ」（古庵り）と評され、これも無点。このように自分の句、古人の句とならべながら子規は句を評する。当然、「風が吹く」を読ん

だら、自句「風吹て鬼逃げて行くけはひあり」を想いだしたことだろう。しかし、虚子の句と並んだとき、子規の句の「鬼逃げて行くけはひ」はつくりごとめいた調子が、とくに目立ったのだろう。それが「句法ノ巧妙、老成家ノ手ニ成リタラン」という嘆賞となった。子規は等類を難ずるだけの人ではなかった。「白露や律の中の立仏 碧梧桐」には「僕旧作「白露に眼の光る仏哉」ト云フアリ。今此句ヲ読テ默然稍久」(はれの日)」という評と二重丸を加えている。虚子の「風が吹く」の評にも、「僕旧作「風吹て……」ト云フアリ。今此句ヲ読テ默然稍久」という評が省略されているとも思われる。子規がそれを省略したのは、その二句に比較できないほどの怪庭を感じていたのだ。

古白は、藤野古白(明治四年~明治二十八年)。母十重が正岡子規の母の妹。子規の従弟である。俳句を子規とともにたしなみ

今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな

芭蕉破れて先住の発句秋の風

秋海棠朽木の露に咲きにけり

等の句によって子規を驚かせた。これら明治二十四年の句を子規は「明治俳句界の啓明と目すべき者なり」と書いている。(「藤野深の伝」。「古白遺稿」子規全集第二十一巻所収) 戯曲、小説にも手を染めるが、認められなかった。明治二十八年四月、東京湯島の下宿で短銃自殺を図り、死去。

虚子の自伝的小説「俳諧師」の篠田水月は古白がモデルとされている。虚子との交流も深かった。

子規は日清戦争の従軍記者として金州に滞在中に古白の死を碧梧桐の手紙によって知る。久保田正文は「生前の古白に、敬遠気味で接していたという子規の自覚が、逆に死後の古白へのつよい想いとして残ったとおもわれるフシがある」と説く。(「藤野古白―その生涯とその文学」。「正岡子規と藤野古白」昭和六十一年・永田書房刊所収) だからこそ

春の夜のそこ行くは誰そ住くは誰そ

蓮咲いて百ヶ日とはなりにけり

雛祭古白に妻はなかりしよ

などの哀切なる追悼句が生まれ、「古白遺稿」の刊行に尽力したのであった。そういう子規であるから、この句を誰よりも深く味わいえたのだろう。

子規の『仰臥漫録』明治三十四年十月十三日に古白が登場している。「余ハ俄ニ精神ガ変ニナツテ来タ」として自殺に魅かれる心境を述べる。そして、そのあとに、小刀と千枚通しの絵が書かれ、その上に「古白曰来」と書かれている。子規の枕辺に古白は現れ、死の世界へと誘おうとしている。「古白曰く来たれ」こう書いたとき、子規の頭の中に「風が吹く」の一句が響いていたかもしれない。